令　和 2 年 度　　学 校 総 合 評 価

6　今年度の重点目標に対する総合評価

学校の現状と課題から次の３点を重点課題とした。

①卒業後の就労生活を見据え、必要な力の整理と習得を目指すための支援の充実〈学習活動〉

②自立に向けた基本的生活習慣の確立－自己管理の向上と家庭との連携を目指して－〈学校生活〉

③ＩＣＴ機器を活用した授業づくりに向けての指導力の向上〈その他（情報）〉

重点課題の評価は、〈学習活動〉では、二つの目標を達成したが、改善の余地があること、また次年度への課題となる部分が見えてきたことから「Ｂ」評価とした。〈その他（情報）〉では、教員のＩＣＴ活用指導力の向上は見られたが研修会の実施回数が目標回数に達しなかったので、これも「Ｂ」評価とした。〈学校生活〉については、保健強化週間の結果配付が目標に達しなかったこと、また保健強化週間の目当ての達成回数が目標に達しなかったため、「Ｃ」評価とした。〈学校生活〉については、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため６月まで休校となり学校行事が年度後半に集中したことや、生活習慣改善の目標が家庭との連携を必要とするものが多かったことから、十分な成果が得られないという結果となった。

学校評議員会では、学校運営の取組や、学校アクションプランの取組について統計や写真で説明した。学校評議員からは、学校運営やアクションプランの取り組み状況について、専門的な立場からのご意見や感想をいただくとともに、今後に向けての建設的な方策について助言をいただいた。

7　次年度へ向けての課題と方策

本校の使命として「卒業後の就職を目指す生徒の確保」、「卒業予定者全員の一般企業等への就職と職場定着」が挙げられ、加えて「社会人としての規範意識・自律した生活の向上」の課題に取り組んできた。今年度見えてきた課題を踏まえ、上記の使命・課題解決を果たすとともに、学校の更なる向上を目指し、学校評議員、保護者、地域、関係機関と連携し、課題解決に取り組んでいきたい。

〈学習活動〉

今年度「到達度チェック表」の改訂を行い、学校生活全般における自己・他者評価を行ったが、評価の機会の設定等不十分な面がみられたことから、来年度は評価機会の設定から見直しを行う。また、作業学習時の他班への互見授業は効果的な改善を行えたので来年度も引き続き行い、教員間の専門性向上につなげたり、担任の生徒理解の場としたりして活用していく。

〈学校生活〉

基本的生活習慣の確立は将来の就職生活を継続していくためには必須であること、就職してから生活習慣を改めることはかなり難しいことから、一斉連絡メール等を使って家庭に情報を提供し、家庭と連携しながら取り組んでいく。

〈その他（情報）〉

タブレット端末の配備がまだ完了していないため、今年度は生徒が使っていないときに教員が研修を行う形であったが、来年度は教員にも一人一台配備されることから、研修の機会を増やし、より活用が進むようにする。また、県や大学等学校外の研修についても情報を集め、研修の機会とする。

8　アクションプラン

<table>
<tr><th colspan="3">令和２年度　富山高等支援学校アクションプラン　―１―</th></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="2">学習活動</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="2">卒業後の就労生活を見据え、必要な力の整理と習得を目指すための支援の充実</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">本校の生徒は、卒業後の就労に向け、就労意欲や働くためのスキルの向上を目指した学習に取り組んでいる。一昨年度から、作業学習で「到達度チェック表」への記入とそれに関する個別面談を行うことで、卒業後の就労生活につながる目標が設定できるようになってきた。しかし、就職して就労を継続していく際に必要となる体調・時間・感情・モチベーション等を自己管理する力の向上も大きな課題と考えられる。そこで、今年度は学校生活全般で支援を行うため学級担任との情報共有や支援の連携を強化するとともに、生徒の「夢」に着目し、生徒一人一人がなりたい自分や就きたい職業について考え、実現に必要な具体的な目標を設定して課題解決に向けて自ら取り組んでいけるよう支援を充実させたいと考える。
また、昨年度から実施している作業学習の互見授業は、「到達度チェック表」の利用の方法や振り返りの状況を各作業班で参考とする良い機会だったが、期間の設定が難しく全ての教員が見学することができなかったことなどが反省として挙がっており、より多くの教員が参加できるように改善する必要がある。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td>①　「私の夢かなえま表（到達度チェック表）」を活用した個別面談</td><td>②　作業学習の互見授業</td></tr>
<tr><td>担任２回、作業担当者２回</td><td>各作業班１回の実施　７割以上の教員参加</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・「到達度チェック表」の就職及び就労継続に必要な力についての項目を見直して、学校生活全般に適用できるものとしたり、生徒の夢やなりたい自分について記入する欄を設けたりするなどして改良した「私の夢かなえま表」を用いた支援を行う。担任が生徒と目標設定や達成度評価を行う面談（年２回）を、作業担当者が生徒と目標達成のための取組についての面談（年２回）を実施する。
・他の作業班を参観できる互見授業を作業班ごとに１回設定し、教員の７割以上が参加できるよう日程調整をする。参加教員が参観で得たことを自分の班に持ち帰り、作業担当教員間で共有し、さらに有効な作業学習運営の工夫ができるようにする。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td>①「私の夢かなえま表」の記入と個別面談

担任２回、作業担当者２回実施</td><td>②作業学習の互見授業
２週間の互見期間を設定し、全ての班が実施。84.2%の教員が参加</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">①「私の夢かなえま表」を用いた支援の手順
⑴生徒は、夢や就きたい職業を「私の夢かなえま表」に記入し、担任と個別面談をする。
⑵作業学習で第１回目の評価（自己・教員評価）をし、作業担当者と個別面談をする。
・評価について話し合い、夢の実現に向けて重点目標を３つ程度選ぶ。
・重点目標を達成するために作業学習の中で取り組む具体的な方策を欄に記入する。
⑶作業学習で第２回目の評価（自己・教員評価）をし、作業担当者と個別面談をする。
・評価について共通理解を図り、目標の達成状況や今後の方策について検討する。
⑷生徒は２学期末までの目標の達成状況を振り返り、担任と個別面談をする。
②作業学習の互見授業の手順
⑴互見期間中に他の作業班を見学に行き、「授業分析シート」の生徒の様子や教員の支援方法の工夫、改善点の欄に記入し、見学先の作業班の主務者に渡す。
⑵作業班の主務者は授業改善について班内で検討会を行い、手立てや支援を改善する。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>B</td><td>①「私の夢かなえま表」を基に、なりたい自分や就きたい職業について目標を設定し、生徒と教員が情報共有し連携を進めることができた。
②互見できる期間を長く設定したことで参加できる教員が増えた。所属班の課題に気付き、授業改善に取り組むきっかけになった。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="2">・「私の夢かなえま表」のネーミングが生徒のやってみようという気にさせる。評価はICTを活用し、エクセルに入力してレーダーチャート図で視覚的に表してみてはどうか。見える化し、作業担当者と担任と本人と三つ重ねることでずれが分かりやすくなる。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="2">・「私の夢かなえま表」について、ICTを活用してレーダーチャート図で視覚的に表すようにする。学校生活全体で活用し、生徒が自己管理できるよう、担任の支援の手続きを見直す。作業学習の互見授業を継続して行い、外部の専門家のアドバイスを受ける機会と組み合わせ、さらに教員の専門性を向上させたい。</td></tr>
</table>

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

<table>
<tr><td colspan="4">令和２年度　富山高等支援学校アクションプラン　―２―</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="3">学校生活</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="3">就労に向けた基本的生活習慣の確立 －自己管理の向上と家庭との連携を目指して－</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="3">本校生徒は全員が一般就労を目指している。安定して働くためには、規則正しい生活習慣を身に付けて健康な生活を送ることが重要であり、校外就業体験を重ねることで体調管理の大切さを実感していく生徒も多い。
昨年度から、この基本的生活習慣の確立を重点課題として指導を進め、１年間で「より良い生活習慣」が身に付いたかどうか、生徒の自己チェックの結果で評価を行ったが、学年によって差があり、特に１学年の評価に低下がみられた。
高校生活に慣れてきたことによる生活の乱れと推察されるが、卒業後の社会的・職業的に自立した生活のために、在学中に生活リズムを自己管理できる力を身に付けることが必要である。あわせて、心身ともに健康な生活を送るためには家庭の理解と協力が不可欠であり、家庭との連携をより密にすることも必要であると考える。
そこで、今年度も継続して、生徒が自分の生活習慣を考える機会を設定し、より健康な生活を送ろうとする意識と態度を育てたい。あわせて、確実な定着のために、保護者との連携を強化し、協力して取り組んでいきたい。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td>保健強化週間において、月ごとのめあてを達成できた生徒の割合（概ね達成も含む）</td><td colspan="2">保健強化週間の結果や健康チェックシートの集計結果を、保護者に配付する回数</td></tr>
<tr><td>７５％以上が７回以上（全９回中）</td><td colspan="2">年間１０回以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="3">・保健の月目標や、昨年度の取り組みの結果から明らかになった健康課題等を基にして、身に付けてほしい生活習慣の改善に取り組む保健強化週間を各月に設ける。
・保健指導シートを使い、朝礼又は終礼の時間にチェックを行う。１週間実施し、反省・感想を記入後家庭に持ち帰り、保護者にコメントを記入してもらう。
・保健体育委員会と連携し、強化週間の呼び掛け等を行う。
・健康チェックシートを作成し、生徒が自分の生活を振り返り、自ら改善点を見付けることができるよう、年度の前半と後半に健康チェックを実施し、集計をとる。
・集計結果を基に、生徒自身が生活習慣等を振り返り、自身の健康課題や生活の改善点を考える。集計後、取組内容や集計結果を保健だより（特別号）で家庭に連絡し、家族で話し合う機会としてもらう。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td>保健強化週間において、月ごとのめあてを達成できた生徒の割合（概ね達成も含む）
７５％以上が５回（2/18現在4回）…９回中</td><td colspan="2">保健強化週間の結果や健康チェックシートの集計結果を、保護者に配付する回数
年間９回（予定含む）</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="3">【６～２月（予定含む）】保健強化週間の実施：９回
・実施する前の週に、その月のめあてについて養護教諭が保健指導を行った。保健指導シートの表側にチェック表、裏側にそのめあてが必要な理由や達成するためのポイントなどを載せ、強化週間中に確認しながら行えるようにした。
【７、８、10、11、12、２、３月（予定含む）】結果を載せた保健だよりの発行：７回
・保健強化週間の結果（グラフやコメント）を載せて配付した。
【７、３月（予定含む）】保健だより（臨時号）の発行：２回
・健康チェックシートの集計結果や１回目と２回目の違いなどを載せて配付した。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>C</td><td colspan="2">・保健強化週間で月ごとのめあてを75%以上の生徒が概ね達成できた月は、９回中５回だった。９項目のうち75%を上回ったものは学校にいる時間に指導できたものだが、下回った項目はスマートフォンの使用と生活リズムに関するものであり、学校内だけでの指導では不十分であったことが伺える。今後、家庭とどのように連携を深めていくかが課題である。
・保健強化週間や健康チェックシートの集計結果を載せた保健だよりの配付は、年間９回行った。学校行事の内容によって、改めて保健指導が必要なときは、その内容を優先するなどしたため、全ての保健だよりに集計結果を載せることができず、目標の10回には届かなかったがそれに近い回数を発行できた。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="3">・保健だよりや保健指導シートによる家庭との連携の他に、学校の安全メールシステムを利用し「今週は保健強化週間です」「今月のめあては〇〇です」などの連絡をすると、話題の共有が進むのではないか。
・働き続けるためには基本的生活習慣の定着は大切であり、これからも指導を継続してほしい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="3">・安全メールの加入率は現時点では100%ではないが、安全メールを利用して連携を進めることも選択肢に入れていきたい。
・スマートフォン等の利用時間については、生徒指導や研修でも指導対象項目となるため、他分掌とも連携を図りながら進める必要がある。</td></tr>
</table>

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

<table>
<tr><td colspan="3">令和２年度　富山高等支援学校アクションプラン　―３―</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="2">その他（情報）</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="2">ＩＣＴ機器を活用した授業づくりに向けての技能の向上</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">・県立学校教育ネット再整備及びＩＣＴ教育推進事業により、iPadやAppleTV等の機器が配備され、校内でのＩＣＴ環境が整ってきた。
・教員のＩＣＴ機器の知識・技能には個人差があり、一人一人の教員が ＩＣＴ機器をより効果的に活用して授業を行うためには、知識や技能の向上が必要である 。
・導入された情報機器やソフトウェアに関して、情報モラルを含めた最新の情報を共有する必要がある。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td>①ＩＣＴ機器活用研修会（１０分程度）を行う。</td><td>②評価が高くなった教員数の割合※令和元年2月末と令和３年２月の「教員のＩＣＴ活用指導力等の実態調査」の結果の比較</td></tr>
<tr><td>１０回以上</td><td>４０％以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・ＩＣＴ機器活用に関する必要な知識・技能が高められるよう研修会を月１回程度（職員会議終了後）などに行ったり、外部講師を呼ぶ研修会を行ったりして知識や技能の向上を目指す。
・ＩＣＴ機器の操作の習熟のみならず，最新の情報が周知できるよう校内の授業で活用可能なアプリケーションやソフトウェアの紹介 、情報モラルに関する事例等を校内研修会やグループウェアで紹介する 。
・授業でより効果的にＩＣＴ機器を活用できるよう公開授業を行い、共有する。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td>①ＩＣＴ機器活用研修会を行う。
８回</td><td>②評価が高くなった教員数の割合
６５％</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">①タブレット端末の操作方法や授業に役立ちそうなアプリの紹介、外部講師を招いての生徒の自立に向けたタブレット端末の活用方法等の研修を行った。
②ＩＣＴ機器活用状況は、６月～２月でのべ 714 校時で、１日平均 3.2 回程度授業での使用が見られ、ほぼ毎日授業で活用している。特に、１、３年生の購入希望者は、就学奨励費を活用してタブレット端末 (iPad) を購入・活用している。教員の多くがＩＣＴ機器の基本的な操作ができるようになってきている。授業を担当する教員は効果的にＩＣＴ機器を活用するという意識が高まり、授業においてＩＣＴ機器が自然な存在となってきている。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>B</td><td>ＩＣＴ機器活用研修会の達成目標は10回以上の研修会実施で、達成率は80％にとどまった。評価が高くなった教員数の割合は65％であったが、ほぼ毎日タブレット端末が使用される状況であり、活用状況に大きな成果が見られた。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="2">・情報担当者のみが研修を進めるのではなく、校内研修担当チームを編制したり、研修内容や進め方について校内で共通理解を行ったりする必要がある。また、限られた研修機会や時間の中で、その効果を高め、教職員の研修の機会を確保していくためには、より効果的で効率的な研修方法を検討し、工夫していくことも大切ではないかと思う。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="2">・研修に参加する教員の実態やニーズを考えたグループでの研修を行ったり、時間的制約の比較的少ない紙上研修や県内外のオンライン研修の情報提供や受講を行ったりする。
・教員１人１台端末環境の整備を見据え、授業や支援に活用できるアプリ等の情報を提供する。</td></tr>
</table>

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）